

# 鎮魂 ウオツゼ島

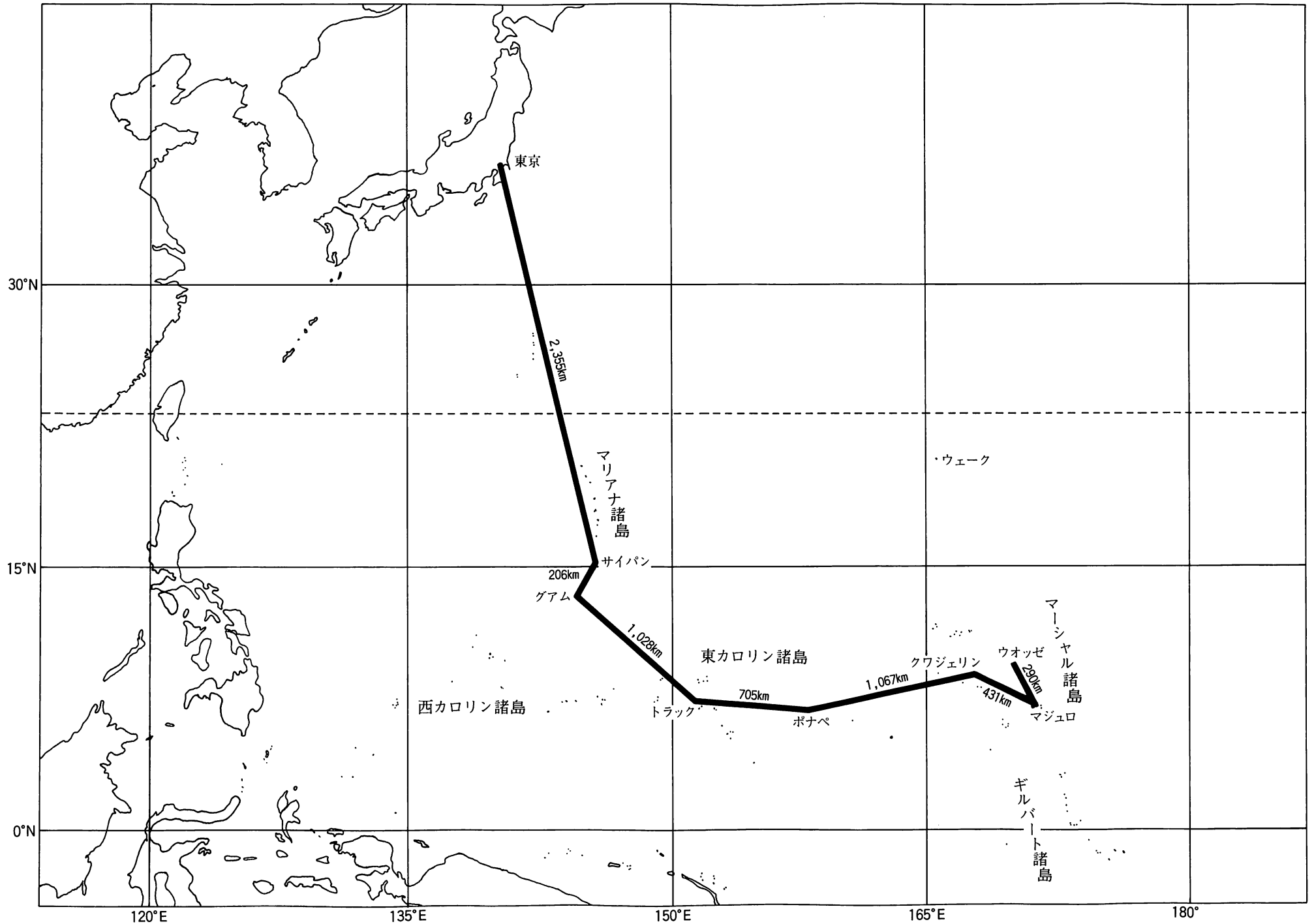
— 第531海軍航空隊戦没者の霊に捧ぐ —



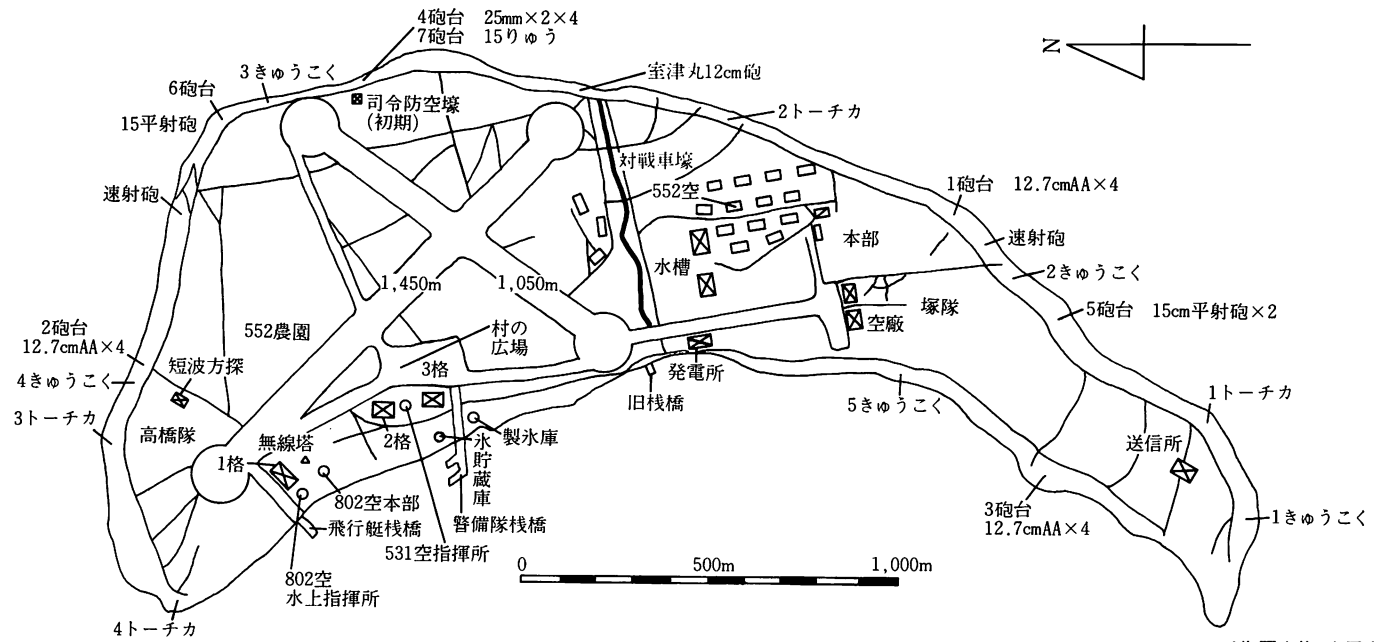
空から見たウオツゼ環礁(サンゴ環礁の左側が外洋、右側が波静かな礁湖)

島田興生氏撮影

# 航空路略図

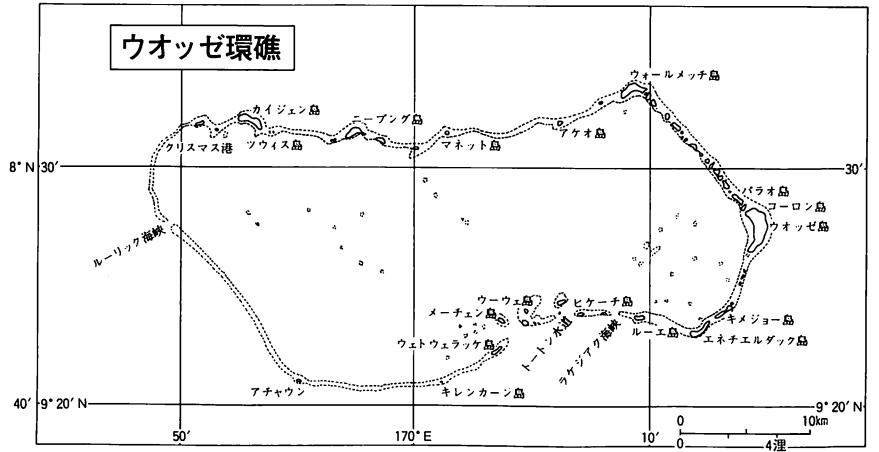


# ウオッセ島 防備図



本部：防備部隊司令部(64警備隊本部)  
 802、552：航空隊本部  
 塚隊、高橋隊(陸軍部隊)  
 1～3格：格納庫(1格は飛行艇用)  
 水槽(半地下式雨水貯水槽)  
 きゅうこく：トーチカの小型のもの  
 531空指揮所、802空水上指揮所

元海軍少佐 土屋太郎氏作図



# 鎮魂 ウオッセ島

篠崎 英夫

このたびマーシャル諸島のウオッセ島を、終戦直後この島から生還した元第531海軍航空隊の隊員5名と隊の遺族3名が厚生省及びマーシャル方面遺族会の派遣するマーシャル・ギルバート諸島慰霊巡拝団に参加して訪れ、戦没者の現地慰霊を行うことが出来ました。更にマーシャル諸島共和国の首都マジュロ郊外の「東太平洋戦没者の碑」前の合同追悼式に、そしてまたマジュロ環礁を出た東太平洋の洋上慰霊式にも参じることが出来ました。

顧みますと、昭和20年10月30日、敗戦の苦渋を胸に懐きながら迎いの空母鳳翔に乗って故国に向うとき、去りゆく島影を見つめながら、必ずいつかこの地を再び訪れ、亡き戦友の霊を弔うことを誓いました。それから40有余年、訪うのがいかにも遅かった悔いはありますが、漸く念願をかなえることが出来ました。私にとり人生の一つの節目を越したという想いがあります。

これにつきましては、厚生省、マーシャル方面遺族会、日本通運(株)の旅行担当者、現地でのマーシャル諸島共和国政府、マジュロおよびウオッセの心暖かい住民と現地日本人の方々のご理解とご配慮の致すところと肝に銘じ、心から感謝の意を表するものであります。

昭和61年8月28日、午前10時5分双発の飛行機に乗って、ご案内役の山村夫人、島田夫人を含め総勢18名マジュロ空港を飛び立つ。「太平洋の真珠」と呼ばれたブルーの海に白い波のリングの美しいマジュロ環礁が眼下にひろがる。間もなくアウル環礁、ついでマロエラップ環礁を右下に見て、飛ぶこと50分、遂にウオッセ環礁が見えて来た。島の上を旋回

する。このときわれわれの慰霊の行を清め祓うがように突然スコールが襲って来た。視界が悪い。長い方の滑走路を使い、その中央附近に着陸、滑走路にはそのコンクリートの上に草がぼうぼうと生えて、昔の面影はない。乗機を出てウオッセ島に足を印する。成田を出て6千軒、胸にこみあげるものがある。この島に多くの友が眠っている。

村は静か、そして緑にあふれていた。雨の中をカンバ村長に伴われて、その集会所らしいところに行く。中に応急の祭壇を設け、神酒、神饌を供える。日本から持って来て炊いた白い飯も。慰霊式は簡素に、しかも厳粛にとり行われた。亡き友よ、来るのが遅かった、まことに申し訳ない、静かに安らかに眠り給えと祈るのみであった。

約30分式が終って外に出ると、スコールは過ぎ去り青空が蘇えている。好奇心と親しさに満ちた眼の色をした子供たちが群がっている。このあたりは村一番の広場らしく、前方に教会の建物、その左に学校らしい建物と二、三の家屋がある。眼を閉じて40有余年前に戻ると、531空の陸上指揮所前にいる、前には滑走路の誘導路、そして広い滑走路がその先に広がる。現実に返り、後ろをふり顧ると鬱然たる大樹の森の中に懐かしい531空の陸上指揮所がほの見えた。40有余年の歳月と爆撃のあとで古びた廃墟と化してはいるが、未だ使用に堪えているようだ。この前でも出撃の前にして飛行隊員が整列し出撃の挨拶をしていたこと、また佐々本健爾司令が前廊で、デッキ・チェアーに深々と休んでおられたことなどが眼に浮ぶ。

慰霊式のあと皆はそれぞれの計画に従って、戦友の墓のあとを、また自分のいた防空壕を、部隊の配置場所を求めて散って行く。

私は北部から中部、そして南部へ、それから出来れば外海に出て、長い滑走路の東端五十鈴丘をきわめ、滑走路を西に動いて、集会所に帰る予定であった。

北部、主として第802航空隊の位置したところである。幸い802空の亡き通信長の令弟高橋克麿氏と終戦後この島から生還した隊員山下治氏が同行して下さる。

集会所から北北西に行く。道はさほど悪くない。そしてところどころに民家が点在する。しかし40余年の歳月は状況を一変している。海岸よりは地味が良いのか、亭々として椰子の木は高く、パンの木などは三、四抱えもある巨木となっている。ジャングルも深い。タコの木、パパイヤ、バナナ、兎の耳（モンパの木）、ヒデリ草（ペンペン草、スベリヒユ）、そしてところどころにカボチャが黄色い花を咲かせている。われわれの食事の糧となった懐しい名の木々、草々。

802空の「航空隊本部」を見つけるのはそんなに困難ではなかった。2階建の黒い苔むした廃墟を森の中に見付ける。2階の一部が崩れ落ちている。中に入ると陽も差し込まず、暗くて鬼気迫る感があった。そして周囲には40年の歳月が育てあげた木々が生い茂っている。

19年2月13日は南の太陽がきらきらした、そして風のない空の何か重くよどむ日だった。この日802空の鴨遊佐夫司令と村上信一主計長ほか20数名が敵機の爆弾の直撃により、この指揮所の内で戦死された。村上主計長と私は短現の同期。今見る崩れ落ちた廃墟のたたずまいは、彼が戦死した直後訪れたときそのままだ。そのときは建物も草や木も爆撃で飛ばされ、すべてが丸裸であったが、今は草と木の繁みの中に在って暗く昔日の面影はない。心から哀悼の意を表す。

「無線塔」本部の近くに無線塔があった筈。草の丈が高くて、なかなか見付け難かったが、やっとの思いで大きな鉄骨の固まりと土台を見付ける。高橋さんは感極まっているようだ。高橋さんと山下さんが内地から持

って来られた供物を捧げ焼香しておられる。私も心から弔意を捧げる。19年2月22日駆逐艦を伴った戦艦3隻の艦砲射撃を受けたとき、通信長の高橋久麿氏が「空間の一点には弾丸は当たらない」といって、豪胆にも無線塔上で下士官1名と弾着を観測しており、このとき砲弾命中により無線塔が崩壊し、高橋通信長、下士官とも戦死された。

「水上戦闘指揮所」ここも本部からさほど遠くなく内海近くに在り、昔の姿を比較的残している。隊舎の跡、隊舎用の水槽に銃眼を削り貫きトーチカ化したものが見られる。

大きな半地下のコンクリートの遺構、何であろうか、医務室兼看護室ではないかという。

井戸、これは現実に住民が使っているようだ。

「四トーチカ」面影なし。砂浜に破壊して倒れている。何か壊れたおもちゃの感。そして本部附近の格納庫の東南の隅、鴨司令、村上主計長、高橋通信長を埋葬した場所を懸命に探すが見当たらない。

小生はここから中部地区に行く、内海に出て飛行艇棧橋の側を通り再び集会所に。そして南に、山城通り、航空廠に通ずる誘導路を進む。この辺り民家を散見する。この内海沿いに遺構が多い。531空の陸上指揮所、そしてその隣りの製氷室、製氷庫が可なりよく昔の形を残している。発電所跡、ここも爆撃により多くの死者を出したところである。3個の大きなタンク、航空廠の跡、警備隊宿舎跡、対戦車用の石塁、小発電所跡、水槽に銃眼を貫いたトーチカらしいもの数個、銃眼の多くある五穹窿（きゅうこく＝天井の円いトーチカ）らしい残骸等々。

ここまでが、時間からいって行かれる南の限界。私の居住していた552空本部附近の防空壕を探するため反転、ジャングルの中を進むが素手では無理（蛮刀を必要とする）、外海に出るにも時間なく、涙を呑み航空廠跡に来て内海に出る。オールド・ピア、そして警備隊棧橋、飛行艇棧橋が遠望され、遠くには離島オリメージが浮ぶ。そしてここから南が531空の

陣地を構築したところだが面影はない。

浜は珊瑚礁の白い砂、キダチハマグルマ、黄色い花のハマアズキ、ピンクっぽい紫色の花のグンバイヒルガオなどの蔓草が茂る。人もなく、波の音、海の響きもなく暑い太陽の下に太古が拡がる。

午後2時30分、集会所に帰る。去るに当って531空の陸上指揮所に最後の別れを告げる。3時5分、住民の見送りを受けて、ウオッセ島を離陸する。このとき別れの涙か、またスコールが来襲した。飛ぶこと20分、マロエラップの飛行場に降りる。滑走路は広く、草も生えていない。この飛行場は昭和18年12月5日、マーシャル諸島沖航空戦において、531空の松崎飛行隊長の率いる攻撃隊が、ウオッセをたち、ここで雷装して攻撃に向ったところであり、全機帰還しなかった。機外に出る。滑走路の傍ら椰子の林の中に零戦の残骸が多い。小休止をして再び空中に、4時25分マジュロ飛行場着。

マジュロの飛行場は美しい。礁湖と外海との狭間に白い長い滑走路が走り、群青の海、紺碧の空、そして赤い吹流しが一つ貿易風にはためいていた。

この慰霊巡拝を振りかえると、ウオッセにいた時間が少なく、しかも自動車が故障して使えないという悪条件にはあったが、現地慰霊の実は充分達成したと思っている。

しかし、したいこと、為すべきことはまだまだたくさんある。

事前の準備もしたが、遺体を埋葬した場所を確認することが全く出来なかったことが、一番心残りである。

最近の雑誌に「太平洋戦争戦没者の遺骨収集は、昭和27年の講話条約発効を待って、28年1月から始められ、「現在も継続中」(厚生省援護局)である。全地域の戦没者概数は約240万人。海没遺骨も多いことから、全部を収集することはとても望み得ない」(61年4月1日現在、遺骨送還数は120万7,400柱、やっと戦没者概数の半ばを超えた)とある。

マーシャル諸島における戦没者数19,232人。遺骨収集2,686柱(厚生省)。

ウオッセ島における戦没者1,969名(防衛庁戦史叢書)、または2,300人(第64警備隊司令吉見信一氏自伝記—少年サンデー)。これに対し、遺骨収集192柱(厚生省)となっている。

(ちなみにウオッセ島からの帰還者は戦史叢書によれば1,386名、吉見自伝記によれば1,060名)

「南海の孤島に眠る骨を疾く収めよ兵等にも戦後はあらん」

朝日歌壇(昭和59年7月)

私も同感である。いつか日本で眠らせてあげたい。

しかし40年間に192柱ということも現実である。

この平和で、緑多く、豊かな島に、亡き友よ、静かに眠り給えとも思う。私はこのウオッセの島を美しい墓苑とも思う。そして心広く、しかも暖かい住民の方々が見守っていて下さる。

住民感情、経済関係、慣習その他多くの難かしい問題があると思うが、もし許されるなら、島に眠る人々を追悼し、また住民への感謝の印として、はたまた平和を祈念して、この島に椰子の木の林、パンの木の森を造ること、さりげなく造ることが出来ないだろうか。

(東京都新宿区市谷薬王寺町30—608

元第531海軍航空隊主計長 海軍主計少佐)

「註」本稿はマーシャル方面遺族会刊行の「環礁」(62年1月1日号)への寄稿を若干手直したものだ。

531空ウオッセ島慰霊巡拝参加者は次のとおり。

遺族・松崎幸子 諏訪完三 桃田志津代

隊員・吉田治郎 田中五郎 岡山尚信 足立広信 篠崎英夫